

日本病理学賞（宿題報告）一覧

年	総会回	受賞者	演題
2023（令和5）	112（下関）	金井 弥栄	発がんエピゲノム機構にかかる分子病理学研究
		田中 伸哉	がんの治療抵抗性を制御する因子の解析－病理が拓く基礎研究
		下川 功	摂食エネルギー制限による老化制御機構
2022（令和4）	111（神戸）	森井 英一	腫瘍の多様性を担う因子の解析－病理検体から学ぶこと
		田中 秀央	心臓不整脈発生の統合的理解を目指して－細胞・分子・機能病理学研究の展開－
		菅井 有	Isolated gland/stroma-based multi omics 解析に基づいた大腸腫瘍の発生進展過程の解明
2021（令和3）	110（東京）	伊藤 隆明	小細胞肺癌の分子病理学：神経内分泌化機構からの展開
		池田 栄二	神経系血管バリアー機能の人為的制御への挑戦－難治性神経疾患の病態解明と新規治療法確立に向けて－
		範 江林	遺伝子改変ウサギモデルによる粥状動脈硬化の分子病態機構の究明及びトランスレーショナルリサーチへの展開
2020（令和2）	109（福岡）→WEB	加藤 光保	幹細胞性誘導によるがんの持続的増殖機構
		西川 祐司	慢性肝疾患および肝腫瘍における肝上皮系細胞の分化・増殖異常の研究
		斎藤 一郎	唾液腺の障害と修復の病理
2019（令和元）	108（東京）	浅田 祐士郎	血栓症の発生病理：アテローム血栓症における血栓形成機序
		松田 道行	Live Pathology の創生を目指して
		古川 徹	膵臓腫瘍の発生進展機構の解明
2018(平成30)	107（札幌）	吉野 正	濾胞性リンパ腫の分子病理と"十二指腸型"疾患単位の確立
		内木 宏延	人アミロイドーシス発症の分子機構
		北川 昌伸	骨髄性腫瘍の病態の捉え方－新しいアプローチを考える
2017(平成29)	106（東京）	片岡 寛章	細胞周囲微小環境におけるプロテアーゼ活性制御とその破綻がもたらす上皮組織の病態
		坂元 亨宇	肝細胞癌発癌進展過程の病理学的解析と個別化診断への展開
		横崎 宏	組織としての癌－消化管癌の発生、組織形成、進展における癌細胞・間質相互作用の意義－
2016(平成28)	105（仙台）	小田 義直	軟部肉腫の病理病態－形態から分子生物学的アプローチへ
		笹原 正清	血小板由来増殖因子の作用機序と生体での役割
		廣田 誠一	Gastrointestinal stromal tumor (GIST) の病態解析と診断
2015(平成27)	104（名古屋）	梶村 春彦	ヒトがんの個体感受性：病理からの分子疫学的アプローチ
		野口 雅之	肺腺癌の組織発生と悪性化の病理学
		豊國 伸哉	酸化ストレス病理学の確立とその疾患予防への展望
2014(平成26)	103（広島）	笠原 正典	主要組織適合遺伝子複合体をめぐる研究の進歩
		竹屋 元裕	マクロファージの活性化と病態
		加藤 良平	甲状腺癌の機能形態学的攻究－甲状腺濾胞の成り立ちから腫瘍まで－
2013(平成25)	102（札幌）	中山 淳	糖鎖遺伝子：クローニングから機能解析、そして病理学へー α 1,4-N- アセチルグルコサミン転移酵素を中心にー
		福本 学	放射線病理学：トロトラスト症肝がんから起承転開
		八木橋操六	糖尿病病理学の進歩－形態と機能との相関を求めてー
2012(平成24)	101（東京）	澤田 典均	生体バリアを担うタイト結合の機能病理学
		中村 卓郎	白血病と骨軟部腫瘍の発生機構：遺伝子変異とそのネットワーク、発生起源の理解に向けて
		上田真喜子	ヒト動脈硬化の病理－新生内膜増殖とプラーク不安定化のメカニズム－
2011（平成23）	100（横浜）	岡安 勲	潰瘍性大腸炎の発症・持続とその大腸発癌・進展機序－慢性臓器炎-発癌系のモデルとして－
		宮園 浩平	がんの浸潤・転移のシグナルネットワーク
2010（平成22）	99（東京）	張ヶ谷健一	病態解析に向けた細胞-細胞、細胞-基質間相互作用の研究－Mam、CD44、ヒアルロンサン解析－

		米澤 傑	ムチン：ヒト癌における臨床病理学的意義と遺伝子発現機構の解明から腫瘍悪性度早期診断システムの構築まで
		上出 利光	組織微小環境の内的調節因子、オステオポンチンの病態病理学
2009 (平成21)	98 (京都)	笹野 公伸	Endocrinology から Intracrinology へ- ヒト乳癌局所でのエストロゲン合成とその作用 -
		深山 正久	感染症と癌 - Epstein Barr ウイルス関連胃癌の病理
		笹栗 靖之	ヒスタミンによるコレステロール・胆汁酸代謝調節と動脈硬化への関与
2008 (平成20)	97 (金沢)	安井 弥	胃がんの Transcriptome dissection - 組織からのシーズの発見とその診断・治療への展開 -
		佐藤 昇志	ヒトがん免疫制御の分子病理学的基盤
		岩崎 宏	軟部腫瘍の病態－日常の診断から実験的探索へ－
2007 (平成19)	96 (大阪)	白井 智之	前立腺癌の発生・進展とその予防に関する基礎的研究
		内藤 眞	マクロファージの分化・機能制御機構と疾患
		高松 哲郎	不整脈源性基質を求めて-バイオフォトニクスを用いた心臓病理学-
2006 (平成18)	95 (東京)	落合 淳志	がん微小環境と浸潤・転移機構－臓器特異がん転移機構解明と治療法開発の試み－
		追手 巍	糸球体腎炎：発症・進展そして糸球体硬化
		山本 哲郎	貧食白血球の浸潤諸パターンを担う新規の白血球走化因子について
2005 (平成17)	94 (横浜)	小野江和則	T細胞免疫系の成立と生体内役割
		小川 勝洋	実験肝発癌の分子病理-初期変化を中心に-
		山口 朗	骨芽細胞の分化調節機構の解析：骨疾患の成因、病態の解析と治療法の開発に向けた基盤研究
2004 (平成16)	93 (札幌)	森 秀樹	大腸がんの発生と予防
		中沼 安二	肝内胆管の病理-原発性胆汁性肝硬変 (PBC)を中心に-
		筒井 祥博	サイトメガロウイルス感染症における神経病原性の発生機序
2003 (平成15)	92 (福岡)	津田 洋幸	がん遺伝子トランスジェニックラットを用いた発がん研究
		長村 義之	下垂体細胞および下垂体腺腫の機能分化の分子機構-転写因子を中心として-
		居石 克夫	血管リモデリングの病理-血管内皮細胞の機能からみた病態解析と臨床研究への応用-
2002 (平成14)	91 (横浜)	立松 正衛	胃癌の発生・進展・修飾要因
		樋野 興夫	癌性化境遇-炎症による肝癌と遺伝による人癌に学ぶ-
		岡田 保典	細胞外マトリックス代謝の病理
2001 (平成13)	90 (東京)	青笹 克之	慢性炎症を基盤に発生する悪性リンパ腫
		名倉 宏	消化管粘膜における生体防御機構と粘膜障害
		高橋 雅英	R E T 癌原遺伝子の病理学
2000 (平成12)	89 (大阪)	廣川 勝昱	老化とストレスと免疫機能
		能勢 真人	膠原病の病像多様性の起源
		恒吉 正澄	軟部肉腫の病理
1999 (平成11)	88 (東京)	林 良夫	シェーグレン症候群の病理
		神代 正道	肝細胞癌の病理；特に形態発生と進展について
		長嶋 和郎	ウイルス性脳症の発生機序
1998 (平成10)	87 (広島)	福島 昭治	環境因子の発癌リスク - 評価と予防への実験病理学的アプローチ -
		秦 順一	胎児性腫瘍の病理 - 細胞分化，器官形成の分子基盤 -
		森 茂郎	びまん性大細胞型リンパ腫の病理
1997 (平成9)	86 (札幌)	吉木 敬	ヒトレトロウイルス感染の病理
		矢谷 隆一	ヒト前立腺癌の発生と進展 - 地理病理学的・分子病理学的アプローチ
		遠藤 雄三	IgA腎症の成因
1996 (平成8)	85 (東京)	日合 弘	リンパ腫の遺伝的感受性の実験的研究
		廣橋 説雄	ヒトがんの多段階発生と組織学的多様性の分子機構
		町並 陸生	骨・関節腫瘍の病理
1995 (平成7)	84 (名古屋)	今井 大	濾胞樹状細胞の形態・機能・病態

		片桐 一	H L A と疾患
		岡田 茂	活性酸素による組織障害と発がん - 鉄依存性腎発がんモデルを中心として -
1994 (平成6)	83 (京都)	渡辺 英伸	早期胆嚢癌の病理
		池原 進	難病の病因
		石川 隆俊	D N A 修復と発癌
1993 (平成5)	82 (東京)	細田 泰弘	肺高血圧症 - その人体病理と実験病理の一断面 -
		小西 陽一	膵癌の発生
		高橋 潔	マクロファージの発生, 分化と機能
1992 (平成4)	81 (仙台)	田原 栄一	ヒト胃癌の発生・増殖・進展 - 分子病理学的アプローチ
		坂倉 照好	病理学における細胞間相互作用 - その分子機構の解析
		白井 俊一	全身性エリテマトーデスの病理
1991 (平成3)	80 (大阪)	森 道夫	細胞骨格の機能病理学 - 肝臓を中心として -
		生田 房弘	脳病巣の修復とアストロサイト
1990 (平成2)	79 (福岡)	北川 知行	肝癌の発生
		竹田 俊男	老化促進モデルマウス (S A M) の開発
		若狭 冶毅	B リンパ腫 - 組織発生, 増殖および進展
1989 (平成元)	78 (京都)	須知 泰山	T 細胞リンパ腫 - 多様性とその生物学的背景 -
		北村 幸彦	マスト細胞. 起源, 分化, 機能
1988 (昭和63)	77 (札幌)	林 裕造	環境化学物質による発癌の病理 - 癌一次予防の病理学的基礎 -
		中村 恭一	大腸癌の構造: 異型度係数から導かれる大腸癌の組織発生とその発育進展
		家森 幸男	循環器疾患の予知・予防病理学
1987 (昭和62)	76 (東京)	土山 秀夫	腫瘍と過形成の病理 - 副腎皮質を場として -
		吉永 秀	炎症による免疫応答の増幅機構とその意義
1986 (昭和61)	75 (仙台)	伊東 信行	膀胱癌 - 発生と進展並びにその修飾 -
		渡辺 慶一	脂質過酸化と細胞傷害: その調節機構としてのグルタチオンペルオキシダーゼの意義
		井川 洋二	レトロウイルスによる白血病発生の機構:腫瘍化関連遺伝子とその標的細胞における発現
1985 (昭和60)	74 (東京)	京極 方久	免疫病の病理 - 組織傷害と慢性化機構の解析 -
		玉置 憲一	ヌードマウス移植人癌の病理 - 担癌個体の病理学への実験的アプローチ -
		奥平 雅彦	Opportunistic Fungus Infection の病理
1984 (昭和59)	73 (東京)	畠山 茂	ヒト辜丸萎縮の病理
		杉山 武敏	癌と染色体異常 - 実験白血病の研究から -
		横路謙次郎	白血病の発生と進展に関する実験的研究
1983 (昭和58)	72 (大阪)	下里 幸雄	肺癌 - その組織発生, 分化, 予後因子について -
		菊地 浩吉	リンパ球表面抗原の解析
1982 (昭和57)	71 (東京)	松本 圭史	性ホルモン依存性腫瘍
		志方 俊夫	ウイルス性肝炎 - その感染と発症 -
		遠城寺宗知	軟部肉腫および肉腫様病変の組織形態学
1981 (昭和56)	70 (東京)	青山 友三	ヘルペス群ウイルスによる感染症の病理学的研究
		森 亘	劇症肝疾患
		藤田 哲哉	細胞動態からみた胃癌の発生と進展
1980 (昭和55)	69 (札幌)	飯島 宗一	生体防禦機構の器官化 - 脾臓を中心として -
		菅野 晴夫	人癌の自然史
		塚田 英之	ペルオキシゾームの病理学的研究
1979 (昭和54)	68 (東京)	渡辺陽之輔	ヒト好中球および白血病細胞の微細構造
		小川 勝士	アデノウイルス12型誘発腫瘍 - とくに実験脳腫瘍へのアプローチ -
1978 (昭和53)	67 (熊本)	小林 博	異物化

		那須 毅	膜(形成)性脂質異常栄養症 membranous lipodystrophy の病理
		米沢 猛	脱髄疾患と脱髄機構
1977 (昭和52)	66 (岡山)	石川 栄世	腎盂・腎炎の病理
		田中 健蔵	線浴現象の病理学的研究
		濱島 義博	川崎病
1976 (昭和51)	65 (仙台)	島峰 徹郎	慢性骨髄不全の病理
		長与 健夫	胃癌発生に関する組織学的及び実験的研究
1975 (昭和50)	64 (高槻)	梶川欽一郎	細胞間マトリックスの病理
		笹野 伸昭	副腎皮質内分泌環境の機能病理学
1974 (昭和49)	63 (名古屋)	山田 明	職業性毒ガス中毒の病理解剖学的研究 - 特に呼吸器癌の発生について -
		竹内 正	腎内血管攣縮の形態学と腎内血行動態
		武田 進	紫外線DNA損傷と修復に関する細胞病理学的研究
1973 (昭和48)	62 (千葉)	西塚 泰章	胸腺機能の実験的研究 - 周生期病理学の立場から
		影山 圭三	肺腺維症のなりたち
		相沢 幹	移植と移植免疫
1972 (昭和47)	61 (東京)	細川 修治	アミロイド症の病理 - 特に発生機序を中心として -
		斎藤 守	マイコトキシンの病理 - 障害作用を示標とした病理学的追求 -
1971 (昭和46)	60 (東京)	大高 祐一	結合組織病の病理 - リウマチを中心として
		花岡 正男	γM抗体産生機構の免疫病理学的研究 - とくに虫垂との関連について
1970 (昭和45)	59 (京都)	北村 四郎	形態学よりみた炎症のメカニズム
		大根田玄寿	脳出血の病理 - 血管病変を中心として
		岡野 錦弥	病理学的表現の客観化,殊に人体白血病とその周辺について
1969 (昭和44)	58 (福岡)	小島 瑞	リンパ節の細胞病理学的研究 - 特に二次小節を中心として
		草野 信男	蛍光抗体法による日本脳炎の研究
1968 (昭和43)	57 (東京)	小野江為則	肝臓の超微構造的病理学
		松本武四郎	脾腫の病理形態学 - とくにいわゆるBanti脾を中心として
19687(昭和42)	56 (東京)	佐藤 春郎	癌転移、腹水腫瘍の実験病理学的研究から
		林 秀男	炎症、その発生と抑制の機構について
1966 (昭和41)	55 (広島)	諏訪 紀夫	肺の構造と機能,特に肺気腫の換気力学について
		武内 忠男	酸素反応からみたグリコーゲン代謝の形態学的研究
1965 (昭和40)	54 (長崎)	妹尾佐知丸	細胞の分化-赤芽球の分化を中心として
		宮地 徹	わが国の肝癌-とくに肝硬変との関係について
1964 (昭和39)	53 (仙台)	太田 邦夫	胃癌の発生
		高木 文一	細胞傷害の超微形態学
1963 (昭和38)	52 (大阪)	嶋田 博	肺胞の構造と病理-光学顕微鏡並びに電子顕微鏡による研究
		神部 誠一	新産児の病理
		家森 武夫	炎症における食細胞の関与とその形態
		川合 貞夫	脳腫瘍の実験的研究
1962 (昭和37)	51 (札幌)	岡林 篤	感染と免疫A 感染の免疫病理学的研究
		藤巻 茂夫	感染と免疫B 免疫とアレルギー - 膠原病の病理
		新井 恒人	動脈硬化症A 動脈硬化症の病理-代謝障害からみた成り立ち,とくに初期像について
		河瀬 収	動脈硬化症B 弾性線維の態度,特に微細構造の変化について
1961(昭和36)	50(東京)	宮川 正澄	無菌動物を利用する病理学的研究
		小林 忠義	病理学領域に於ける組織誘導の問題
1960(昭和35)	49(新潟)	三宅 仁	肝臓の病理
		林 一郎	奇形の内分泌に関する研究

		馬場 為義	奇形発生の実験的研究
1959(昭和34)	48(東京)	武藤 幸治	基底膜の形態学的研究
		橋本美智雄	骨髓の病理
1958(昭和33)	47(大阪)	伊藤 辰治	脳腫瘍の病理
		江口 季雄	臓器血管構成の立体病理学的研究
1957(昭和32)	46(岡山)	渡辺 漸	放射性同位元素による実験的研究を中心としての白血病の成立に関する病理形態学的研究
		安田 竜夫	内分泌の組織化学
1956(昭和31)	45(札幌)	石川太刀雄	分化, その形態と機作
		新保幸太郎	ウイルス性疾患の病理
1955(昭和30)	44(京都)	宮崎 吉夫	脱髄性脳脊髄炎の実験的研究
		荒木 正哉	末梢神経の病理形態学的考察
1954(昭和29)	43(熊本)	青木 貞章	肺結核の治癒機転の病理学的研究
		今井 環	人体癌発育状況の形態学的研究
1953(昭和28)	42(仙台)	滝沢延次郎	唾液腺内分泌の病理
		宮田 栄	結合織病理・形態学的研究
1952(昭和27)	41(岡山)	赤崎 兼義	細網内皮系とその腫瘍
		岡本 耕造	糖尿病の実験的研究
1951(昭和26)	40(東京)	久保 久雄	解磷酵素の組織化学的研究
		高松 英雄	解磷酵素の組織化学的研究
		大島 福造	家鶏肉腫の病理
1950(昭和25)	39(名古屋)	松岡 茂	脳卒中の病理
		安保 寿	脳腫脹に関する研究
1949(昭和24)	38(福岡)	浜崎 幸雄	細胞核病理学
		天野 重安	炎症について
		C.F.Tesmer	挨拶
1948(昭和23)	37(京都)	J.D.Grissmann	アメリカの医学教育
		Dr.Knighat	結核予防対策
		波多野輔久	感光性色素の結核に及ぼす影響
		武田 勝男	結核病変の成立とアレルギー
1947(昭和22)	36(大阪)	鈴江 懐	動脈硬化症の実験的研究
		吉田 富三	長崎系腹水肉腫の研究
1946(昭和21)	35(東京)	なし	なし
1944(昭和19)	34(京都)中止	(鈴木遂) 中止	(腸チフスの病理 解剖学的及び組織学的研究) 中止
1943(昭和18)	33(東京)	田部 浩	流行性脳炎の病理解剖 甲, 内臓の病変
		林 道倫	同 乙, 中枢神経系統の病変
1942(昭和17)	32(東京)	和気 巖	脳脊髄内に於ける選択的局巢の発生機序
1941(昭和16)	31(大阪)	小杉 虎一	物質代謝機転の形態学的表現に関する基本的観察
		平井 正民	軍陣病理学
1940(昭和15)	30(千葉)	小野 興作	淋巴網状組織
1939(昭和14)	29(岡山)	馬杉 復三	アレルギーとその病理学的意義
1938(昭和13)	28(京都)	杉山 繁輝	白血球の核移動の本態と其臨床的意義
1937(昭和12)	27(東京)	木下 良順	発癌性化学物質の研究
1936(昭和11)	26(京都)	竹内 清	結核病変の組織発生学
1935(昭和10)	25(金沢)	森 茂樹	腫瘍と内分泌
1934(昭和9)	24(東京)	木村 哲二	動物界に於けるグリコーゲンの発生分布に就ての形態学的研究
1933(昭和8)	23(福岡)	田村 於兎	心筋の発生並に特殊心筋系統に就て

1932(昭和7)	22(名古屋)	片瀬 淡	体質病理の実験的研究
1931(昭和6)	21(京都)	大野 章三	実験的黄疸発生論
1930(昭和5)	20(大阪)	藤浪 鑑	家鶏肉腫の病理
1929(昭和4)	19(仙台)	徳光 美福	特異性乃至非特異性細胞賦活作用とホルモン
1928(昭和3)	18(東京)	石橋 松蔵	体外組織培養による細胞機能並に形態学的研究
1927(昭和2)	17(新潟)	今 裕	組織の銀反応に就て
1926(大正15)	16(東京)	佐多 愛彦	結核重感染に就て
1925(大正14)	15(札幌)	三田村篤志郎	腎臓分泌の形態及生理
1924(大正13)	14(大阪)	福士 政一	甲状腺 病理解剖学的方面
		福島 東作	同 臨床的化学的方面
1923 (大正12)	13 (東京)	横川 定	蛔虫病 病理解剖学的方面
		吉田 貞雄	同 動物学的方面
1922 (大正11)	12 (京都)	川上 漸	糸状虫に就て
		鈴木 立男	腎炎に就て
1921 (大正10)	11 (東京)	村田 宮吉	哺乳動物の脚気様疾患 病理解剖学的方面
		尾関 栄	同 化学的方面
1920 (大正9)	10 (東京)	緒方知三郎	馬類白米病に就て
		稲本亀五郎	肺ジストマの病理解剖
1919 (大正8)	9 (京都)	解田 隆	実験動物胆石症に就て
		木村 男也	末梢神経の退行性及び進行性変化に就て
1918 (大正7)	8 (東京)	清野 謙次	血液及組織白血球殊に組織球性細胞に就て
		勝沼 精蔵	血液及組織の白血球に就て
1917 (大正6)	7 (東京)	川村 麟也	脂肪及類脂肪 形態学的方面
		須藤 憲三	同 化学的方面
1916 (大正5)	6 (東京)	中村八太郎	内分泌 病理学的方面
		林 春雄	同 生物学的方面
1915 (大正4)	5 (東京)	三浦謹之助	素質 体質及素因論
		山極勝三郎	同 癌腫と素因
		草間 滋	同 伝染病と素因
1914 (大正3)	4 (東京)	速見 猛	肝硬変 実験的方面
		長与 又郎	同 病理解剖学方面
1913 (大正2)	3 (京都)	工藤外三郎	血管硬変 臨床的方面
		田原 淳	同 病理解剖的方面
		今 裕	同 動物試験
1912 (明治45)	2 (東京)	稲田 竜吉	脚気 臨床的方面
		長与 又郎	同 病理解剖学方面
		照内 豊	同 医化学的方面
1911 (明治44)	1 (東京)	藤浪 鑑 (代 中村八太郎)	日本住血吸虫病 病理解剖的方面
		土屋 岩保 (代 宮川米次)	同 臨床的方面
		桂田富士郎	同 動物的方面